

大森山動物園を核とした自然学習ラインを 学習施設の整備も必要



国立大学法人秋田大学 ● 教授 井上 正鉄

私はコケの研究を専門としている。コケは世界中の様々な環境の中に生息しており、それを現地に赴いて採取してきた。そのため、世界中のいろいろな場所に行った。日本列島はもちろん、北極や南極、辺境と言われる地域にも行った。そうした際に、偶然野生生物の営みを目にするのができたのだが、その経験はまさに「宇宙船地球号」を実感するものであった。

こうした経験とは別に、私自身の子育て中の動物園との関わりについても、たくさんの思い出がある。大森山動物園がフタコブラクダを導入した際、上の子どもを連れて見に行った。また、下の子どもが初めて「二足歩行」をした記念すべき日は、大森山動物園の広場でお弁当を食べた直後であった。

さらに、上の子どもを上野動物園に連れて行った時のことだが、帰り際に何故か「ゾウのぬいぐるみを三つ欲しい」と言い出した。聞けば、お父さんとお母さん、そして自分の分として3個買って欲しいのだと言う。このように、動物園は子どもにとっても感情移入しやすく、人を優しくしてくれる場所であり、多種多様な動物の営みを見るということによって命の尊さを学んだり、自然に関わる様々な事柄を肌で感じ取ることができるのである。



こうした生き物の息吹を感じるということとは別に、世界的には、生物の多様性をいかに保っていくかという種の保全の問題や、環境の劣悪化による絶滅危惧種の増大などの問題が顕在化しており、動物園はそうしたことを学ぶ絶好の場所でもある。

動物園には、生きた素材として多種多様な動物がおり、それを身近なものとしてとらえることができる。大森山動物園や上野動物園には何度も足を運んだが、その度に子ども達の目は輝いていた。そして、動物の動きや姿に感嘆の声を上げる。動物園は、こうした幼児期の純粋な輝きを生涯持ち続けていく一助になるものではないかと思う。

ここで、世界各地を訪問した際に目にした動物や、その時に感じたことなどを紹介したい。

中国では、社会構造の変化により牧場化が進んでおり、自然が狭められ、自然保護との共生が課題となっている。

カナダでは、シーラカンスの剥製を見ることができるのだが、シーラカンス自体は現在でも存在する。環境さえよければ生き続けることができるという証である。

種の絶滅ということに関連して言えば、日本ではエゾオオカミが人間が生きていくために狩猟され、絶滅している。

進化の袋小路に入ったと言われるモーリシャスのドーダーは、最初に入植したオランダ人が食肉用にブタを導入したことにより駆逐され、その後に入植したフランス人には狩猟の対象となり、絶滅してしまった。

動物園には動物を見るための様々な仕掛けがあるのだが、こうしたものを通していろいろなことを考えることができる。自然を見せてくれる動物園に足繁く通って欲しい。「Study Nature, Not Book or web」である。